

# 災害から生活復興に向かうプロセスと内的変容に関する一考察

## －複線径路等至性アプローチを用いた東日本大震災の事例分析－

### Visualizing Life Restoration Process and Internal Transformation after Disaster

#### － A Case Analysis of the Great East Japan Earthquake Using Trajectory Equifinality Approach －

河 本 尋 子

KOUMOTO Hiroko

#### 1. 研究の背景と目的

被災者の生活復興とは何か。「各人の被災体験は独自なものであり、被災地に暮らす人びとの数だけ異なる生活復興が存在する<sup>1)</sup>」。生活復興という用語の定義が一意でなく、使用者によってさまざまに変化することが端的に表現されている。

「復興」の元来の意味は、「一度衰えたり壊れたりしたものを（が）もう一度盛んにする（なる）こと<sup>2)</sup>」である。宮原<sup>3)</sup>は、阪神・淡路大震災前後の新旧復興観の混在する状況を論じ、元来の復興の定義に立ち返るとともに、被災者らの感性を活用し、彼らの生活に根ざした再生型の復興という概念を示した。被災者の視点に立ち、くらしやすまい、まちなどの復興に対する彼らの感受性を重視する提言がなされた。

前述の感性による復興に関する研究として、たとえば木村他<sup>4)</sup>がある。同研究では、「生活の充実度」「生活の満足度」「1年後の生活の見通し」に関する項目群から成る尺度を用いて、被災者の生活復興感の量的算出が試みられた<sup>4)</sup>。黒宮他<sup>5)</sup>では、田村他<sup>6)</sup>による生活再建課題7要素<sup>(1)</sup>（①すまい、②人と人とのつながり、③まち、④そなえ、⑤こことからだ、⑥くらしむき、⑦行政とのかかわり）と生活復興感との関係が分析された。その結果、生活復興感に影響を及ぼす要素群として、特に、すまい・人と人とのつながりの2つを挙げ、すまい満足度の高さと人と人とのつながりの強さが生活復興感を高めていたことが確認された<sup>5)</sup>。既往成果から、生活復興感の高低に影響を及ぼす諸要因の理解が深められてきている。

他方、質的研究では、宮本<sup>7)</sup>によって、復興支援における外部支援者と地域のかかわりを挙げ、現状を否定して欠点改善を「めざす」かかわりではなく、ありのままを肯定する「すごす」かかわりの重要性が指摘された。内発的復興と支援のありかたの関係を示すものだった。河本他<sup>8)</sup>では、被災者の生活再建プロセスの分析を通して、応急仮設住宅の民間賃貸住宅借上げ型に居住経験のある対象ケースでは、家族が結束して能動的に被害に対応していた様子が明らかにされた。被災者の内面の強さという一つの側面をみることができる。

大規模災害による生活への影響は多岐に及び、その立て直しには長い時間を要する。災害からの生活復興に向かう長期的プロセスに関する知見は、量的研究による把握がなされにくく、十分に蓄積されているとはいえない。そのような長期的プロセスに関する研究成果の積み重ねも、同様に時間を要するものであり、継続的な実施により詳細把握につなげる必要がある。そこで本研究は、被災者の個別の震災経験をとり上げ、災害後の長期にわたる生活復興プロセスの詳細理解に焦点を置く。生活復興に至るまでに経験される多様な選択と径路、その選択・径路に影響を及ぼした諸要因、そして時間経過のなかで生じた個人の内的変容等について明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究の手続き

### 2-1. 複線径路等至性アプローチ

阪神・淡路大震災の教訓から、災害後に社会が経験する災害過程を科学的に記述・集積する「災害エスノグラフィー<sup>9)</sup>」の必要性が説かれた。その記述・集積にあたっては、経験・対応の事実を時間的展開に即して本人による表現を尊重することが重要とされた<sup>9)</sup>。前述をふまえるなら、被災者が辿った災害過程の記述には、当事者の表現を尊重し、且つ共通理解を可能にする方法論が必要といえる。そこで本研究では、質的研究法の1つ：複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach、以下 TEA)<sup>たとえは<sup>10)</sup></sup>を採用することとした。

TEA は、文化心理学を背景に、個々人の生命・生活・人生としてのライフの有り様を描画・理解する方法論で、3つの要素から構成される<sup>10)</sup>。具体的には、歴史的構造化ご招待 (Historically Structured Inviting、以下 HSI)、発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis、以下 TLMG)、複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Model、以下 TEM) である。HSI のサンプリング方法論に基づいて研究対象の経験抽出を行い、TLMG によって人やその他のシステムの内的変容過程の記述および理解を図る。そして TEM 描画を通して、「非可逆的時間とともに生きる人間の経験の総体を描く (p.210)<sup>10)</sup>」統合的方法論である。

特に TEM は、TEA の構成要素のうち、中心に位置付けられる。図1は、TEM 図のイメージである。非可逆的な時間の流れを前提として、ある行動選択によって、径路の分岐点 (Bifurcation Point、以下 BFP) から「ある定常状態に等しく (Equi) 辿りつく (final) (p.3)<sup>10)</sup>」等至点 (Equifinality Point、以下 EFP) までの過程の多様性・複線性が表現される。EFP は、「TEA の根幹をなす概念 (p.5)<sup>11)</sup>」であり、ベルタランフィによる一般システム理論におけるオープンシステムが必ず等至性を呈するという原理<sup>12)</sup>に基づくものである<sup>11)</sup>。さらに、研究対象者・研究者間に TEM の図をトランス・ビューとして介在させ、両者の「見方 (view) の融合 (trans) (p.9)<sup>10)</sup>」に活用することができる。さまざまな分岐・径路・等至点の可能性と、各分岐における径路の選択可能性、実際に辿った径路等が描かれている。

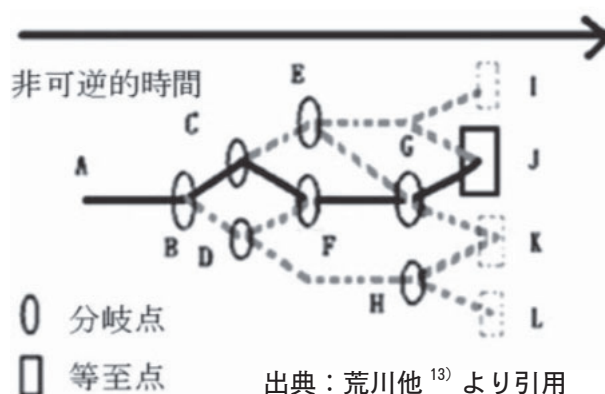


図1 TEM 図のイメージ

## 2-2. 調査概要

研究手続きでは、半構造化面接法を用いた。対象者1名は、東日本大震災の被災地域である東北地方太平洋沿岸部在住で、自宅流出せずに在宅避難の生活を経験された壮年（当時）の男性であった。自宅流出しなかった対象選定に至った理由としては、将来の災害において在宅避難・被災となるケースの増加が想定されることが挙げられる<sup>14)</sup>。彼らの生活復興に向かうプロセス詳細の理解が、災害施策に不可欠になると考えられる。

調査日程は、表1のとおり、面接法調査2回（2018.9、2019.7）、電話による聞き取り調査1回（2020.5）の合計3回であった。2回以降の調査では、TEMをトランス・ビューとして用いた。

表1 調査詳細

No	日程	調査法	主な項目
1	2018.9.29 13:00-15:00 (120分)	半構造化面接	3.11以降の生活
2	2019.7.20 13:00-15:00 (120分)	半構造化面接	第1回調査以降の生活
3	2020.3.25 13:00-13:15 (15分)	電話での聞き取り	第2回調査以降の生活

## 2-3. 分析

分析手続きでは、調査各回逐語録を用いて、TEMおよびTLMGによる分析をおこなった。手順は、以下のとおり実施した。

- ① 各回逐語録を作成
- ② 逐語録より、語りの内容と時系列の流れを把握
- ③ 時系列にしたがって、語りの内容のまとまりを単位として整理
- ④ まとまりを単位として、そこに含まれるTEMの各要素を抽出
- ⑤ 時系列を念頭に抽出要素を整理し、TEM描画により分析。TEMの焦点化した範囲をTLMGにより分析
- ⑥ 作成したTEM・TLMGは、トランス・ビューとして、対象者へのフィードバックを実施、内容を確認し、必要に応じて修正







## 3. 結果・考察

### 3-1. TEM

東日本大震災被災を経験し、自宅が流出しなかったかたを対象としたことから、「東日本大震災を被災」を本研究におけるTEMの必須通過点（Obligatory Passage Point、以下OPP）、「自宅流出せず」を必須通過点かつ分岐点（OPP/BFP）とした。本研究におけるTEM（図2）の特徴として、逐語録の内容のまとまりを反映し、径路を3つに分けて描画したことが挙げられる。上から順に、家屋・家族員を含めた内容に関連する「自宅・家族」、こころと身体の「健康」に関連する内容、仕事や職場環境に関連する「生業」の3つであった（図2）。また、本研究のTEMの径路は、4つの期間に区切られた。第1期：自力再建邁進期、第2期：苦難連続遭遇期、第3期：対人関係回避期、第4期：生活意欲微回復期とそれぞれ名付けた。これは、分析手続きの③より、意味のまとまりに注目した結果である。なお、第1回調査結果のTEM作成では、著者により仮にEFPを「生活復興」と設定したが、後続の調査結果を反



表 2 本研究の TEM・TLMG 凡例

No	記号	用語	用語略	説明
1		必須通過点 Obligatory Passage Point	OPP	・制度的：法律や条例、義務教育等 ・慣習的：慣習的に実施している、又は実施される方がよいとされるもの ・結果的：多くの人に共通して生じる経験や状態
2		等至点 Equifinality Point	EFP	複数の径路が到達するポイント。個々人が固有な径路をたどっていても、時間経過のなかで、等しく (Equi) 到達 (Final) するポイントがあるのではないかという考え方
3		両極化した等至点 Polarized EFP	P-EFP	複数の径路が到達するポイントの対極として考えられるポイント。研究者側が設定したものであり、本人にとっては異なる可能性もある
4		分岐点 Bifurcation Point	BFP	径路の分岐。人生径路では、必ずしも可視的な選択岐路が存在するばかりではない可能性。SD・SGがせめぎ合うポイント
5		促進的記号	-	あえて意識をしていなくても、場の状況や文脈を汲みつつ、これらの「記号」を介して行動を選択している。文化的・社会的なパワーが影響する可視・不可視的な指示性や類似性の記号により後続に対して作動する
6		選択・行為	-	その他の選択や行為
7		社会的助勢 Social Guidance	SG	EFPに向かう際の行動・選択を助け、プラスに働く社会的力
8		社会的方向づけ Social Direction	SD	EFPに向かう際の行動・選択を阻害し、マイナスに働く社会的力
9		実線矢印	-	語りから得られた径路
10		点線矢印	-	実際の径路とは異なり、理論的に存在すると考えられる径路
11		吹き出し	-	調査のなかで語られた言葉
12		価値変容点 Value Transformation Moment	VTM	個人において価値が変容するような経験や状態

参考：安田・サトウ<sup>10)</sup>、安田他<sup>11) 15)</sup> を元に筆者作成

映したものが図 2 である。

表 2 は、TEM および TLMG の凡例である。表に含まれる記号のうち、両極化した等至点 (Polarized-EFP、以下 P-EFP) とは、等至点から対極的な事象を設定することにより、動的径路の分析・理解の深化を促すものである<sup>11)</sup>。また、促進的記号とは、場の状況や文脈において、主体による後続の行動や意思決定を促進させ、価値・信念レベルに影響を及ぼすものである<sup>15)</sup>。その他の重要概念として、社会的助勢 (Social Guidance、以下 SG)、社会的方向づけ (Social Direction、以下 SD) がある<sup>10) 11)</sup>。SG は、EFP に向かう際の行動・選択を助ける方向に働くプラスの力である。それに対して、SD は EFP に至るのを阻害し、行動・選択にマイナスに働く力である<sup>10) 11)</sup>。

### 第 1 期：自力再建邁進期〈震災直後～1 年半〉

災害発生直後より、自力による自宅・生業の再建が目指されていた。たとえば自宅被害に関して、他者の力を借りずに「自分たちでなんとか頑張ろう」という表現がみられている (下線部 a1)。生業についても同様に「自分たちだけでなんとか再建しよう (下線部 a2)」と言い表されていた。連日の職場冠水に遭いながら実行可能な作業を積み重ね、事業継続を図ろうとしていた。自力による再建を目指して能動的行動を起こしていた被災者の姿の根底には、「自分たちでなんとか頑張ろう」という意識がある。家族や職場の仲間との連帯に根差し、再建可能性に望みを託した対応である。こうした特徴は、河本他<sup>8)</sup> においても同様に、借上げ仮設住宅入居を経験した世帯にみられたものである。

【自分たちでなんとか頑張ろう】

皆々避難したわけじゃないんだ。だから、家にいる人はいたの、この辺は。水引いてからも頑張って。2階にいて、あと下がってきて。そしてだから、ある物で食いつないでた、みたいな感じ。(中略)  
<sup>a1</sup>ここは田舎だから、簡単にもらって食うとか、そういう感覚がわりと薄いといえば薄いんです。「なんとか自分たちで、ある物で頑張ろう」みたいな感じで。

【自分たちだけでなんとか生業を再建しよう】

私はその当時、<sup>a2</sup>全部自分たちだけ、工場の人間と自分たちだけでなんとか再建しようということで、片付けたり。それから、2～3ヶ月してから、(中略)昼間2時間とか3時間、潮が引く時間があるんです、水がなくなる時間。そのときだけ仕事して。(中略)もう水が来ちゃうと、1mぐらいになるから。

第2期：苦難連続遭遇期〈震災後1年半～3年〉

震災後1年半から2年の時期には、自宅と生業における大きな分岐がみられた。堤防完成によって、冠水被害から解放された矢先に再び豪雨で浸水し、落ち着かない状況が続いていた時期に重なる。再建の方向性が見えない状況下、BFP4「慌てて先に母屋を解体」する選択をとることになり(下線部 b1)、その後も家屋解体に関連する情報・対応との齟齬が重なり(下線部 b2)、傾いた離れでの生活を経て、家族員の意見不一致へとつながっていた。他方、生業では、風評被害による急激な売上減少を受け(下線部 b3)、BFP5「工場再建断念」し、自宅の問題に借金苦が重なった。しかし、こうした苦境においても、引き続き、「自分たちでできることはやろう」という意識が維持され、倉庫改築が行われていた。

東日本大震災の家屋解体に関連する申請では、避難所への情報提供やコールセンター設置等により幅広い広報が行われた事例<sup>16)</sup>もあった。こうした情報提供径路の複数確保と並行して、特に、在宅避難の住民に対しては、アウトリーチが必要である。本事例のような住民の認識とのずれの発生回避のため

【母屋解体をめぐる】

急激に「明日解体して」みたいなことを言われて。だから、<sup>b1</sup>なんかよく分からないうちに母屋を壊してしまったのね。(中略)あとで冷静になって考えたら(中略)「何で壊した?」って言われて。基礎も何でもありませんよ。基礎も全然割れてないし、綺麗なまんまで傾きもなかったんですよ、本当にうちの家、母屋って。

【家屋解体をめぐる認識と情報のずれ】

最初は「一部解体でもいい」って言われてたから、そういうことでお願いしていたの。<sup>b2</sup>それで、先に母屋を壊してしまって。こっち(倉庫)も今度、屋根とか壁を剥いでもったっちゃ、解体するのに。だから「え?」って。今さらそんなこと(一部解体は自費と)言われても。「じゃ、母屋を直した方が、かかったお金半分で済むもの」って思ったんだけど。

【福島第一原発事故の影響による風評被害】

工場もそんなこんなで再建挫折して。当初やろうと思って頑張ったんだけど、1年半は。とっても駄目で、例の風評被害が出て、そういう物売れなくなったんだ。本当に売れなくなったんですよ。あの風評っていうの、すごいですよ。<sup>b3</sup>震災のその年は、「何でもいいから、売るから持ってきて」って。(中略)そしたら2年目になったら、「いや、売れねえんだわ」って。

には、被災者生活再建に関連する支援・対応の履歴追跡・共有を可能にする、アウトリーチ型の統括的システム<sup>たとえば17)</sup>が不可欠だろう。加えて、自宅再建の方向性をいつまでに決断すべきか、その時期についての明確かつ十分な周知も要する。

表3では、TEMの径路に影響を及ぼしたSD・SGを抽出した。表に示されたとおり、第2期までにSD・SGの多くが集中していた。SDが大半であり、いかにEFPへの到達が妨げられていたかが示されている。特に第1期後半から第2期冒頭にある、自宅や生業の支援にかかわる行政対応の情報と対象者の認識のずれが、後続のSD群の要因になるといふ負の連鎖につながったと考えられる。

表3 SD・SG一覧

No	期	分類	内容	詳細	分類
1	1	SD	自宅・家族	近隣に配慮し基礎半分	自宅の環境
2	1	SD	自宅・家族	半年間自宅1階冠水	自宅の環境
3	1	SD	生業	半年間工場1階冠水	職場の環境
4	1	SD	生業	簡単にもらって食う感覚薄い	自立への意識
5	1	SD	生業	堤防完成で作業増加	職場の環境
6	1	SD	生業	県融資への安易な考え	職場の環境
7	1	SD	健康	震災対応で入院延期	本人の健康
8	1	SG	生業	友人との交流	人間関係
9	1	SG	自宅・家族	近所と助け合い	人間関係
10	1	SG	自宅・家族	堤防完成で冠水止まる	自宅の環境
11	2	SD	自宅・家族	再建の方向性決定を待つ話だった	行政の対応
12	2	SD	生業	福島第一原発事故の影響	職場の環境
13	2	SD	自宅・家族	父の認知症悪化	家族の健康
14	2	SD	自宅・家族	機材高騰	近隣の環境
15	2	SD	自宅・家族	近所で大工探し	近隣の環境
16	2	SD	自宅・家族	部分解体補助無	行政の対応
17	2	SD	自宅・家族	リフォーム扱いへの変更	行政の対応
18	2	SD	生業	県緊急融資の借金	職場の環境
19	2	SD	生業	震災以前の借金	家計の状況
20	2	SG	自宅・家族	生活再建支援金	行政の対応
21	2	SG	自宅・家族	母屋保険金	家計の状況
22	4	SD	自宅・家族	膝痛悪化	本人の健康
23	4	SD	自宅・家族	腰痛再発	本人の健康
24	4	SG	自宅・家族	知人からの助言	人間関係
25	4	SG	生業	工場跡地売却	職場の環境
26	4	SG	生業	妻定年間近	家族の健康
27	4	SG	生業	妻を労わる気持ち	家族の健康
28	4	SG	生業	生活破綻避けたい	自立への意識

### 第3期：対人関係回避期〈震災後4～6年〉

震災後の数年に及ぶ奔走から、こころ・身体への影響が積み重なって徐々に本格化し、対人関係回避の第3期に入った。母屋解体を巡る後悔のなか、自らの療養生活と父親の在宅介護を両立した時期である。災害発生直後からの「自分たちでなんとか頑張ろう」という意識に支えられてきた再建への対応が、長期にわたって何度も挫かれたことは大きい。

この時期に関する語りは、母屋解体の後悔と在宅介護、対人関係回避という2つに集約される。在宅介護のために自宅の再建を急いだが、母屋を壊す必要がなかったのではないかという問いかけから、下線部c1につながっていた。また、それによる精神面への影響がc2から読みとられる。なお、SDおよびSG等の要素はみられなかった。

母屋は、自己の価値形成や存在を守る中心<sup>18)</sup>と捉えられよう。また語りから、生業は、震災以前には海外への技術支援にも尽力しながら、築き上げたものだった。そしてそれは健康によって支えられていただろう。これらは、図2の径路3つ：自宅・家族、生業、健康であった。そのすべてが解体した影響が第3期の対人関係回避として表出したといえる。

【母屋を解体した後悔】

最後まで（父親は）「自分の家でない」って言ったんだよ。「ここ、俺の家じゃねえ」って。なんぼ環境がよくなっても、そう言ったんだよ。やっぱりねえ。だから、よほど思い入れがあったんだなあと思って。だから、なおさら壊してから、逆に後悔したけどもね。<sup>c1</sup> たしかに、壊さなくたっていい家を壊したんだなって。

【人と会いたくない<sup>c2</sup>】

自分の精神もね、おかしくなったの。自分で言うのも変だけども。今だから言うけどもさ。（中略）家の母屋を壊すあたりからかなあ。なんかもやもやして、もちゃもちゃしてて精神的におかしくて。人と会いたくないの。あれ、本当ですよ。（中略）そういう極限状態にいるんだね、人間っておかしいもんだね。

第4期：生活意欲微回復期〈震災後7年〜〉

知人からの助言（SG）をきっかけに、生業の再び働きたい（BFP9）という意思が芽生え、実際にパートタイムの仕事を探して、働き始める選択（BFP10）がとられた（図2）。これらは、EFPに向かう重要な歩みである。健康面の不安要素が依然としてあるものの、生活意欲が回復しつつある。

自宅・職場が流出しなかったことによるこころ・身体への負担は、周囲から見えにくい。個人の復興に関する語りでは、生きているうちの復興は想像できず、身体も心も元に戻るのは死ぬときと考えられていた（下線部 d1）。災害による日常の剥奪から、それを取り返そうとするせめぎ合いの連続の中、最終的には死ぬときに被災状況が終わると捉えられていたことは、本研究の対象者にとっての災害の本質である。

自分で分かんないところで、（精神的に）負担がかかってるんだよね、震災の。（中略）本当の、一人一人、個人の復興なんていうのは、個人個人皆違うと思うんです、どう思うかは。そういうのが本当の復興なんだろうなって思うけれどもね。だから生きてるうちに復興すんのかなあなんて思うけれどもね。（中略）<sup>d1</sup> 身体も元さ戻って、心も戻って、うん。多分そいつは死ぬときだよ、きっとね、うん。あっちの世界に行く時じゃねえのすかや。すっかりそういうのが、終わるのは。<sup>d2</sup> 生きてるうちには終わんねえのでねえのすかや、こいつは、うん。って言うと、マイナス思考になってしまうよね、多分。

3-2. TLMG

TLMG は、TEA の「自己のモデル (p.7) <sup>11)</sup>」として、3つの層によって構成される精神をモデル化し、個々人の価値観・信念の変容過程の解明を図るものである <sup>10)</sup>。下から第1層では行為等の個別活動レベル、第2層では、後続の行動のトリガーとなる記号レベルを表現する。そして第3層に表現される信念・価値レベルの変容へと至るメカニズムを明らかにするものである <sup>10)</sup>。

以下では、図2の点線四角で示された、BFP1・BFP2からBFP7までの径路に焦点化し、TLMGによる分析をおこなった（図3）。過半のSD・SGと、その影響を受けるBFPが集中している時期でもある。

図3のTLMG第1層では、個別の行動のうちBFPとそれをめぐって語られた思いを主に抽出した。第2層では、自らが置かれた状況の促進的記号として捉えられたものが示されている。第2層と第1層



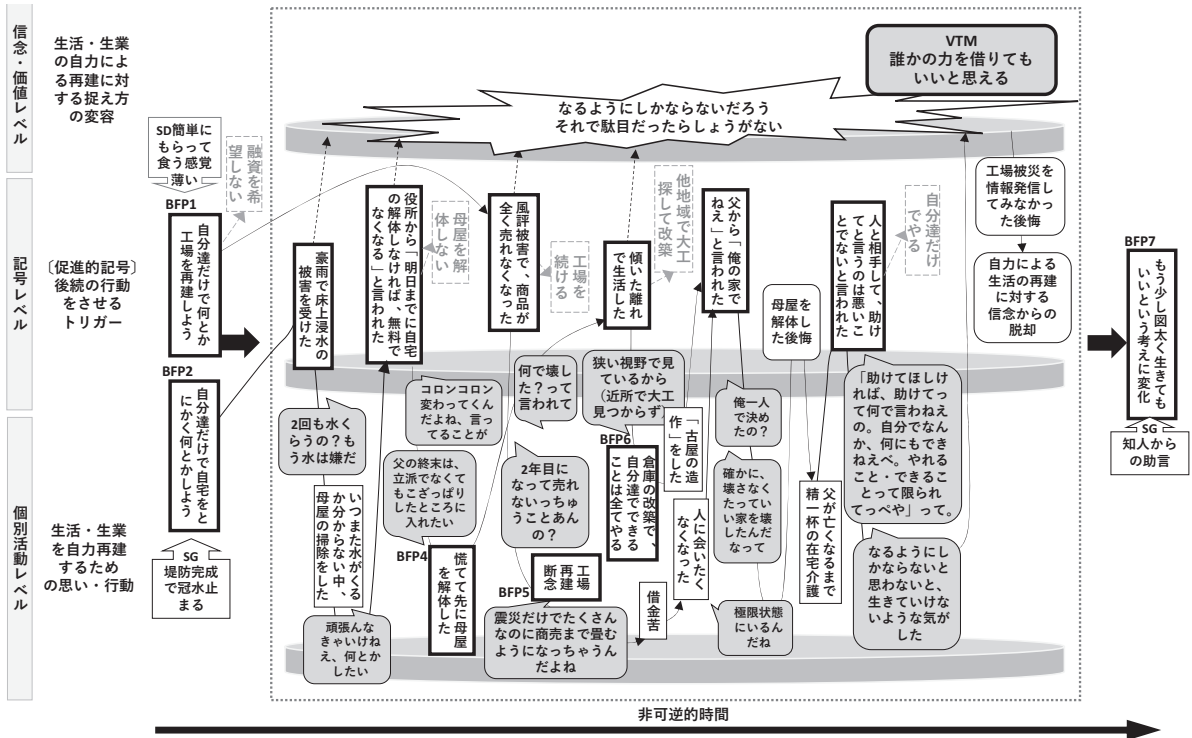


図3 TLMG：自力による生活等の再建に関する捉え方の変容

の間を行き来しながら、促進的記号に対する問いかけが複数回みられ、結果として第3層の信念・価値の変化に至ったプロセスが表現されている。問いかけの例として、堤防完成後になぜ浸水を経験するのか、なぜ突然商品が売れなくなるのか、家の解体は私1人が決めたのか等がある。酒井・渥美<sup>19)</sup>は、このような「なぜ」という自問自答を繰り返し行うことによって解決につなげようとしている状態を挙げ、その間に高いストレスが持続していると述べている。こうした問いかけの繰り返しを経て、第1期の「自分たちでなんとか頑張ろう」という自力による生活・生業の再建に対する信念が、知人からの助言を契機に、第4期の「誰かの力を借りてもいいと思える」価値変容のVTM（図2・図3）を迎えることになった。こうして、BFP7「もう少し図太く生きてもいいという考えに変化」という価値・信念レベルの内的変容が表れたといえる。

災害後の「自分たちでなんとか頑張ろう」という被災者の自意識は、本来であれば、早期の生活・生業の自力再建実現に不可欠である。しかし本研究のTEMおよびTLMGを用いた分析結果では、長期にわたる生活復興へのプロセスにおいて、この意識からの脱却が必要だった。

### 3-3. 「未達等至点」という捉え方

TEAの構成要素HSIでは、EFP的出来事の経験者を対象に、EFPに至るプロセスについて話をしていた方法をとる<sup>11)</sup>。研究者側の立場から、対象者のEFP到達をある程度想定し、HSIの対象選定がおこなわれることになる。

本事例では、本人が考える「本当の復興」(EFP)には、死ぬまで到達し得ないのではないかと捉えられていたことが、調査を進めるなかで明らかになった。しかし、そうしたおそれを意識しながらも、EFP到達を断念したわけではない。語りにもみられるとおり（たとえば、下線部d2）、頭に浮かんだ第3

期再来のイメージを払いのけ、「働きたい」や「趣味を兼ねたパートを始めた」の BFP に代表されるような、P-EFP 回避の努力がなされていた（図 2）。それは、自力による生活等の再建の捉え方に内的変容が生じた結果であった（図 3）。そして第 4 期以降では、EFP とその両極にある P-EFP に囲まれた、連続性をもつ広がりの中を進みながら、常に EFP への道を模索し続けている状態といえるだろう。

前段の EFP と P-EFP の範囲は、TEA において「等至点の幅（Zone of Finality、以下 ZOF）<sup>(2)</sup>」と呼称され、その領域について概念化されている<sup>11)</sup>。「達成されるべき目的や将来展望を一つのポイントとして考えるのではなく、領域（Zone）として考える（p.94）<sup>20)</sup>」ものである。本事例では、EFP「身体も心も元に戻って、日々の食事の心配をせずに済む普通の生活」と、P-EFP「健康上の問題に借金苦が重なり、生活破綻の末、日々の食べるものに困る生活」の間の領域である。

対象者本人が捉えているように、P-EFP 回避を意図して進まなければ、分岐の方向によっては、P-EFP への理論上の径路が現実になるおそれが付きまとう。調査時点では現実に EFP に達していない「未達」の状態にあって、死ぬまで到達し得ないという「未達」の可能性を意識しながらも、常に EFP の方向を目指す。そしてそれは、ともすれば P-EFP の理想につながるマイナス思考に陥りがちだが、意識的に引き戻し、僅かでも EFP に近づこうとする分岐の選択でもある。ZOF の領域の最端部に位置し、到達し得ない「未達」の可能性を意識しながらも、その方向を目指して進み続ける。

本研究では、以上のような EFP を、「未達等至点」という新しい概念として捉えることを提案したい。利点として 2 つが考えられる。第一に、HSI の対象範囲が広がることである。第二に、EFP 到達に至るまでの過去に加えて、EFP 到達を目指す現在から未来への径路に対する注目を、手法としてより明示的に含められることである。

ZOF の概念を活用した EFP には、上記のほかに、TEA の枠組みをキャリアデザインに援用した自己の理想の未来像である「未来等至点」<sup>21)</sup>がある。現在の雇用環境の不安定さから、「今までの思考からは見通しの立たない領域（p.97）<sup>21)</sup>」として、ZOF の外に描かれる未来展望である。本研究の「未達等至点」は ZOF の領域内である点においても、未来等至点と異なる。

#### 4. 結論

本研究は、東日本大震災の個別の震災経験をとり上げ、災害発生以降の長期にわたる被災者の生活復興プロセスを明らかにすることを目的とした。具体的には、どのような選択と径路を辿って現在に至ったのか。その径路に影響をあたえた要因は何であったか。また、個々人の中にどのような変容が生じていたのか等であった。

研究手続きとして、自宅流出せずに在宅避難の生活を経験されたかたを対象に、半構造化面接法によるインタビュー調査を継続的に実施した。また、分析法として複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いて、プロセスおよび内的変容の可視化をおこなった。

その結果、本事例の複線径路等至性モデル（TEM）は、大きく「自宅・家族」「生業」「健康（こころ・身体）」という 3 つの流れによって表現された。また、プロセスは 4 つの段階に分けられ、「第 1 期：自力再建邁進期」「第 2 期：苦難連続遭遇期」「第 3 期：対人関係回避期」「第 4 期：生活意欲微回復期」とそれぞれ名付けた。他者からの助けを借りず「自分／自分たちで何とかしよう」と、被害に対して行動していた第 1 期に続いて、第 2 期には引き続き自力による再建をめざしながら、持病悪化、母屋解体、

風評被害、工場再建断念、家族内の意見不一致等が重なり、第3期の対人関係回避につながった。そこへ、知人からの助言により「図太く生きてもいい」という再建に関する捉え方の変化が生じ、再び生活復興に向かおうと就労意欲を取り戻すことにつながっていた。

発生の三層モデル（TLMG）の分析からは、母屋解体や工場再建断念等をめぐる問いかけと、連続する困難な状況に何とか対応しようとする思いとのせめぎ合いを通して、母屋解体の後悔に至った様子が捉えられた。父親の在宅介護を経て、知人の助言により「誰かの力を借りてもいいと思える」価値レベルの変容へと至り、就業意欲が生じるきっかけになったと考えられる。また本事例では、存命中の生活復興（EFP）の実現は想像できず、死ぬまで災害の影響から身も心も元に戻り得ないのではないかと本人が捉えているケースだった。本事例をもとに「未達等至点」という捉え方を提案した。

本研究の課題は、個別のプロセスの描画であることといえるだろう。個別事例に関する詳細理解への取り組みから、今後においては多様な径路の把握へと展開し、災害からの長期にわたる生活復興プロセスの類型化を目指していきたい。

## 謝 辞

本研究の調査を行うにあたって、多くのかたがたにご支援・ご協力いただきました。ここに記し、深く御礼申し上げます。また、複線径路等至性アプローチを用いた分析では、貴重なご教示・ご助言をいただきました立命館大学サトウタツヤ先生、安田裕子先生をはじめ、TEA研究会の先生方・皆さまに心より感謝申し上げます。

本研究は、平成30年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手研究（B））「災害からの生活復興に向けた被災者の意思決定メカニズムの解明（研究代表者：河本尋子 常葉大学）」によるものです。

## 補 注

### (1) 生活再建課題7要素

田村他<sup>6)</sup>における7要素の順に、ひらがな表記／漢字表記もそのまま用いた。

### (2) 等至点の幅（Zone of Finality：ZOF）

安田・サトウ<sup>10)</sup>では、Zone of Finality：ZOFは「目標の領域」であるが、安田他<sup>11)</sup>では「等至点の幅」とされている。本研究では、事例の内容を考慮して「等至点の幅」を用いた。

## 参考・引用文献一覧

- 1) 兵庫県（2006）「生活復興調査 調査結果報告書」Ⅱ調査結果 第1部平成13年1月時点での復興のようす，p.19
- 2) 金田一京助・山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄（2001）【復興】『新明解国語辞典第五版』，三省堂，p1232
- 3) 宮原浩二郎（2006）<特集><災害復興制度の研究>「復興」とは何か：再生型災害復興と成熟社会，先端社会研究第5号，関西学院大学出版会，pp.5-40
- 4) 木村玲欧・林春男・田村圭子・立木茂雄・野田隆・矢守克也・黒宮亜希子・浦田康幸（2006）社会調査による生活再建過程モニタリング指標の開発－阪神・淡路大震災から10年間の復興のようす－，

- 地域安全学会論文集, No.8, pp.415-424
- 5) 黒宮亜希子・立木茂雄・林春男・野田隆・田村圭子・木村怜欧 (2006) 阪神淡路大震災被災者の生活復興過程にみる4つのパターンー 2001年・2003年・2005年兵庫県生活復興パネル調査結果報告ー, 地域安全学会論文集, No.8, pp.405-414
  - 6) 田村圭子・林春男・立木茂雄・木村玲欧 (2001) 阪神・淡路大震災からの生活再建7要素モデルの検証ー 2001年京大防災研復興調査報告ー, 地域安全学会論文集 No.3, pp.33-40
  - 7) 宮本匠 (2015) 災害復興における“めざす”かかわりと“すごす”かかわり, ー東日本大震災の復興曲線インタビューから, 質的心理学研究 第14号, No.14pp.6-18
  - 8) 河本尋子・重川希志依・田中聡・立木茂雄 (2015) 借り上げ仮設住宅居住経験者の特徴に関する一考察, 地域安全学会梗概集 No.36, pp.27-28
  - 9) 林春男・重川希志依 (1997) 69. 災害エスノグラフィーから災害エスノロジーへ, 地域安全学会論文報告集 (7), pp.376-379
  - 10) 安田裕子・サトウタツヤ編著 (2012) 『TEMでわかる人生の径路ー質的研究の新展開ー』誠信書房
  - 11) 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編 (2015) 『TEA理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社
  - 12) Bertalanffy, L. von 1968 General System Theory -Foundations, Development, Applications, George Braziller New York
  - 13) 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) 複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例, 立命館人間科学研究, 25, pp.95-107
  - 14) 岡田広行 (2015) 『被災弱者』岩波新書
  - 15) 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編 (2015) 『TEA実践編 複線径路等至性アプローチを活用する』新曜社
  - 16) 仙台市 (2017) 「東日本大震災 仙台市 復興五年記録誌」
  - 17) 仙台市 (2014) 仙台市被災者生活再建推進プログラム、2020.8.27access  
<http://www.city.sendai.jp/kenko-jigyosuishin/shise/daishinsai/fukko/sekatsu/documents/honpen.pdf>
  - 18) 木嶋恭子 (2017) 阪神・淡路大震災による場所の喪失と場所への愛着:複線径路・等至性モデル(TEM)による分析, 兵庫地理, 62, pp.39-58.
  - 19) 酒井明子・渥美公秀 (2019) 東日本大震災後の被災者の心理的回復過程 震災後7年間の語りの変化 実験社会心理学研究 Vol.59, No.2 (Advance publication)
  - 20) サトウタツヤ編著 (2009) 『TEMではじめる質的研究』誠信書房
  - 21) サトウタツヤ・安田裕子編 (2017) 『TEMでひろがる社会実装: ライフの充実を支援する』誠信書房